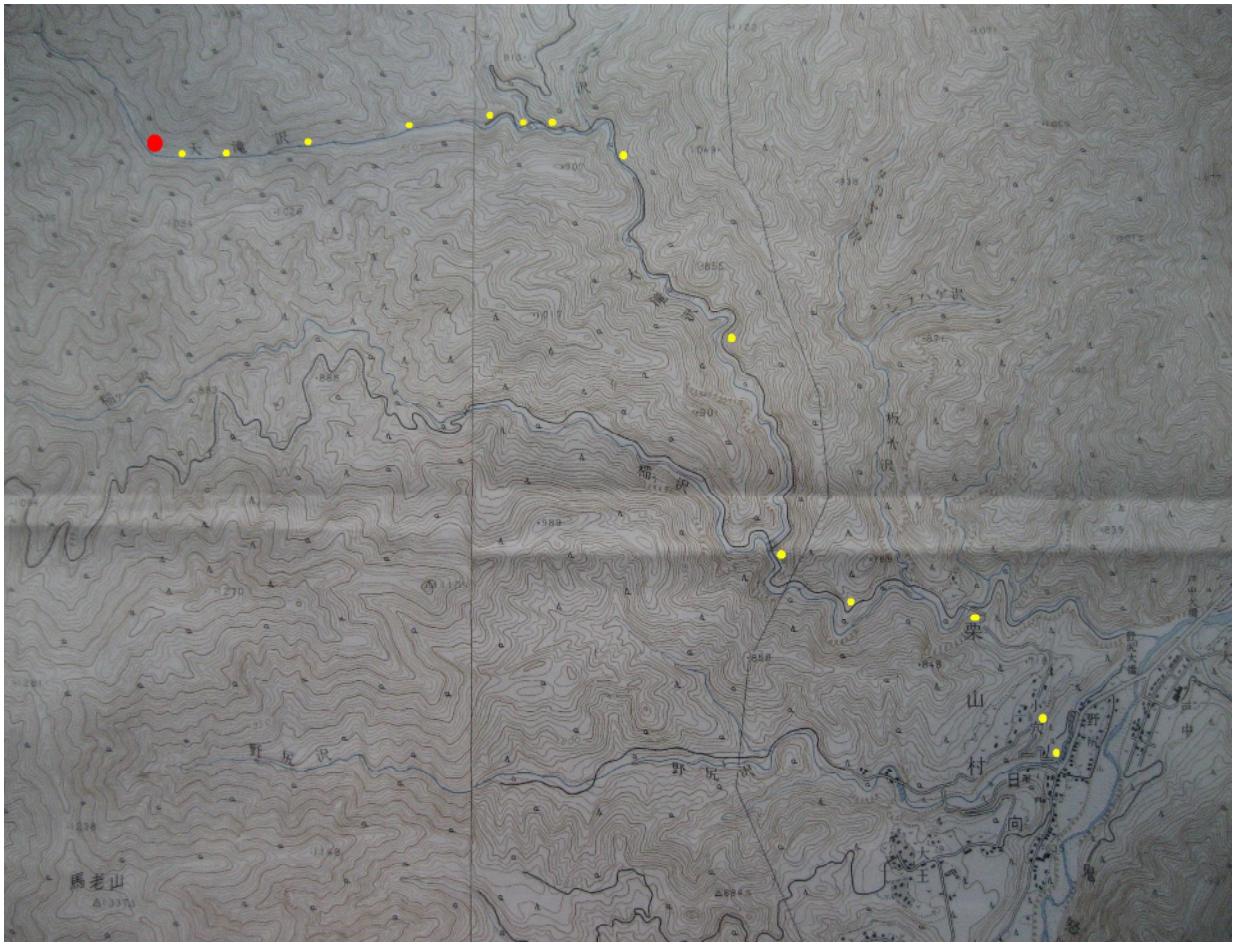
（６６）日向（ひなた）銅山跡

参考文献（１）によれば、「栃木県塩谷郡栗山村日向にあり、鬼怒川の支流大滝川の上流、東武線藤原駅の西北方２０ｋｍの位置にある。・・・鉱石、鉱物は黄銅鉱、黄鉄鉱、磁硫鉄鉱、閃亜鉛鉱など・・・」。これにより、大滝川の上流にあることは確認できたが、詳細な位置は未知であった。大滝沢は明神ヶ岳（標高１５９４ｍ）の頂上を源流とする主流沢の１つである。偶然、明神ヶ岳から大滝沢を下った登山紀行を、ネットで読むことができた。２５年も前のものであるが。「大滝沢の下山途中で、沢が東に大きく曲がるところに鉱山跡がある。日向鉱山跡である。」との記述を目にした。最新の地形図と対比させ、大凡の位置は確認できた。後掲の地形図中の赤丸付近である。地形図からわかるように、道は途中で切れている。道がなければ、沢を遡ることにして、探査に出かけた。そして鉱山跡を確認することができた。適当な標本も採集できた。

栗山村の日向地区に向かっていく。鬼怒川温泉方面から進んできたならば、八汐大橋を渡り、野尻地区で、右側に分岐している林道に入っていく。地形図中に、黄色丸で進路を示している。最初は稲ヶ沢に沿って進み、野尻から約１．２ｋｍの当たりで、大滝沢に入っていく。更に、約２ｋｍ進んだ当たりでサツ沢に架かっている「猿沢橋」を渡る。進んでいくと、左側に砂防ダムがあり、前方で道は２つに分岐している。左の道を選ぶ。直ぐに「さかふねさわばし」を渡る。左側に、適当な広さの空き地がある。ここに車を駐車させよう。車が進めそうな道が先に続いているが、崩落箇所が多い。ここから歩こう。

探査結果であるが、大滝側の左岸に沿って、鉱山跡までの道は残っている。所によっては、消えかかっているが。この道も黄色丸で示している。次の地形図が詳しい。



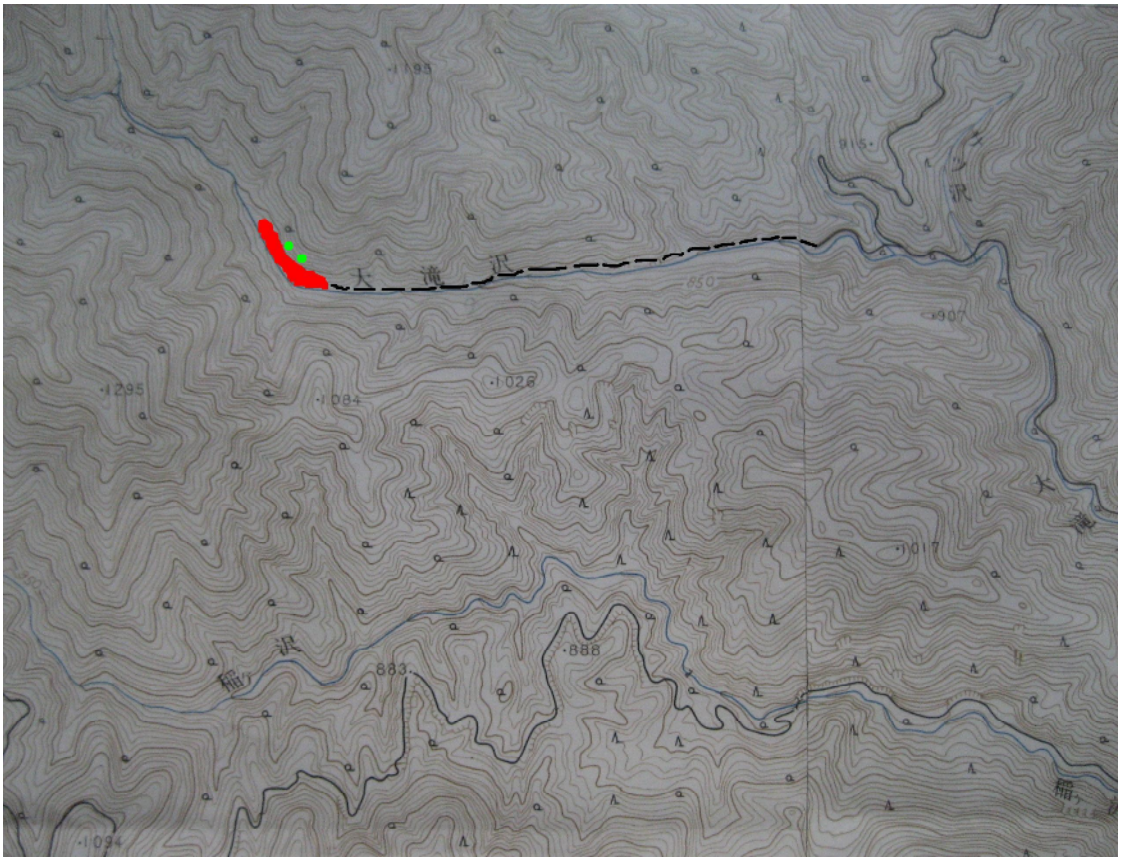
赤丸が鉱山跡、黄丸の連続が経路。

地図　　国土地理院２万５千分の１地形図「川俣個＋川治」
探査日　　２０１０年　１１月

参考文献

（１）「日本地方鉱床誌　関東地方」。今井、河井、宮沢編者。朝倉書店。１９７３年発行。

前掲の地形図中で切れていた道の先に、道は延びていた。下の拡大した地形図中に、黒破線で示している。大滝側の左岸の、沢より少し高いところに、なだらかに伸びている。ただし、途中で消えかかってもいる。約１時間あまりの行程で、鉱山跡にたどり着く。赤で塗りつぶしている位置である。鉱山跡は沢の左岸に沿って、数百mに渡って残っている。黄緑丸は確認した坑口跡である。



前掲の拡大図。黒破線が林道。赤が鉱山跡。黄緑が坑口跡２つ。

鉱山跡写真

「さかふねさわばし」。この少し先左側に空き地がある。車を降りてそこから歩く。鉱山跡まで約１時間。道は途中から消えかかりつつある箇所もある。が、大滝沢の左岸を西に延びている。

途中の道の様子。岸壁を切り開いて造っている。それだけ投資するだけの鉱山であったのであろう。これは良い方の道である。とにかく左岸をひたすら西へ進んで行く。

と、前方右側の斜面に、石垣組が見え、前方に、ズリらしいマウントが見える。左端下は大滝沢である。

前掲のズリの上に立って、前方（上流側）を見る。左側が大滝沢。ズリの平地がずっと先まで伸びている。
大滝川の左岸に２００m～３００mに渡って鉱山跡があった。

前掲の写真の更に前方の様子である。鉱山施設の機器類が散在している。大きなポールトランスもあったので、かっては電線がここまで伸びていたのであろう。

鉱石の粉砕器か。土台の木が朽ちて、今にも倒れそうである。このあたり一体に、機器類が散在している。

この先の方にも、石垣積みが続いている。鉱夫の住居跡のようであった。

坑口は２つ見つけた。その内の１つ。閉塞されている。

採集鉱物写真

磁硫鉄鉱は辺り一面に残っている。採集は容易である。磁硫鉄鉱は磁性を持っているので、磁石を持っていけば便利である。時間をかけてじっくり採集を行えば、他の標本も得ることができよう。初回なので、周りの探査は十分に行っていない。行えば、また新たな発見があろう。次回以降を期待したい。良いハイキングコースでもある。